2019.6.1

現代俳句千葉

133号

新会長あいさつ

創立四十周年に、走る！

会長　並木邑人

三月十七日の総会で新たな会長に選任されました。よろしくお願いいたします。

前任の秋尾敏会長には、大畑元会長の急逝を受けて、千葉県現代俳句協会を見事に立て直していただきました。また、千葉県の活動を活性化するため、本部のＨＰに地区活動を紹介し、予算に「研究研修費」を新設して、本部ジュニア部の活動を紹介するなど、種々の改革を成し遂げていただきました。

現代俳句協会は、会員数の減少という大きな試練に直面しています。しかしこれは人口減少時代と、目の前に利益が見えるかで判断する価値観の性急化が進んだ結果で、日本中の組織が直面している課題でもあります。

さて人事の刷新とともに判断を迫られるものに、当協会の創立四十周年を何時どのように遂行するかというテーマがあります。総会後の四月に実行委員会を開催し、その骨格が見えてきましたので概要を紹介し、就任に当っての決意表明とさせていただきます。

まず記念大会の開催時期ですが、令和二年三月の総会に併せて実施することといたしました。事業内容は前号でも触れましたように、俳句大会、特別講演会、功労者表彰、合同句集の編纂、これらを披露する記念式典と全体の財政を支える基金の募集です。

このため、実行委員会の下に俳句大会、合同句集、基金募集の各委員会と、全体を調整する記念式典委員会を設置し、各副会長、幹事長に責任者を務めていただきます。また全体の実行委員長には私が就くことといたしました。

開催まで九ヶ月を切った今となっては、腹を括って突っ走るしかありませんが、役員には新鮮な人材も揃いましたし、この勢いを来年まで継続していきたいと念じています。会員の皆様には、これからお願いすることが多々ありますが、現代俳句を愛する私たちの気持を、記念大会の成功で表現したいものと思っています。宜しくお願いいたします。

目　次

新会長あいさつ　並木邑人 …… 1
退任のあいさつ　秋尾　敏 …… 2
新役員紹介 …… 2
定期総会 …… 3～4
俳句大会 …… 5～6
諸家近詠 …… 7～8
私の感銘句 …… 9～11
会員・会友の近況 …… 10～11
春の吟行会 …… 12～13
津田沼研究句会報告 …… 14
青葉研究句会報告 …… 14
小出治重氏・三苫知夫氏を偲ぶ …… 15
柏研究句会報告 …… 15
図書紹介　ひろば　掲示板 …… 16

千葉県現代俳句協会会報

退任のあいさつ

現代俳句は未来の俳句

前会長　秋尾　敏

現代俳句は現代の俳句だと皆が言うようになった。しかし、はたしてそうか。現代俳句は、未来の俳句ではなかったのか。

俳文学会や俳人協会の多くの人は、俳句の基準を過去に求める。芭蕉が〈ものの見えたる光〉と言ったとか、俳諧は〈座の文学〉であったとか。だから俳句もそうあるべきだというのである。

たしかに、俳句の歴史を知ることは重要である。けれど、過去にあるすべてが、これからの俳句にとって有益なものであるとは限らない。当然そこには、取捨選択がなければならない。〈ものの見えたる光〉や〈座の文学〉は私も好きだが、過去の全てが未来に生かせるわけではない。

伝統俳句協会の多くの人は、虚子の作り出した基準を今に継続させようとする。これは、未来永劫、虚子の時代を〈現代〉と考えていこうとする考えである。その意味で、伝統俳句は〈現代の俳句〉なのである。

伝統俳句の良いところは、基準が不変であるから分かり易く、俳句を広め易いところにある。けれど、虚子の時代の〈近代〉はすでに過去の時代となってしまった。この情報化社会を〈近代〉と考えることはできない。だとするならば、そこには何かが付け加えられねばならないだろう。

かつて現代俳句協会には、未だ見ぬ未来の俳句を追究する人たちがたくさんいたように思う。その人たちの試みの多くは消えてしまったかも知れないが、そのエネルギーが俳句を今日に生き延びさせてきた。彼らは、それまでにない俳句を作ろうとした。

いや、現代俳句協会だけではない。どの協会にも、未来の俳句を探究する人たちはいたし、今もいる。私は、その人たちを信じたい。

私たち俳人にとって、俳句の過去はあくまで参考であって、すべてではない。野田市の最後の樽職人と言われた玉ノ井芳雄さんは、過去にない製品を作って批判されたとき、「私たちの伝統とは技術であって、〈もの〉そのものではない」と答えた。私もそう思う。

私も俳句の過去を調べている。特に、誰も調べようとしない明治前期の俳句を徹底して調べている。正岡子規に否定された旧派の宗匠たちが、実際どのような句を詠んでいたのかについて。

しかし、それは規範を求めてのことではない。ヒントを得るためである。まだ誰も知らないヒントが、そこにあるのではないか。未だ誰も見たことのない〈未来の俳句〉を生み出すためのヒントが。

千葉県現代俳句協会新役員

（平成三十一年～令和三年）

会　長	並木邑人		
副会長	高木一惠	髙橋健文	髙橋宗史
幹事長	徳吉洋二郎		
副幹事長	山﨑幸子	清水　伶	
事務局長	羽村美和子		
事務局次長	伊与田すみ		
会　計	三須民惠		
広報部長	木之下みゆき		
企画部長	東　國人		
事業部長	越野雄治		
渉外部長	久野康子		
幹　事	石井紀美子	上野紫泉	岡田春人
	小野　功	楠見惠子	小林　実
	下村洋子	白木暢子	高野春子
	たけなか華那	野口京子	林阿愚林
	林　ゆみ	星野一惠	増田豊子
	深山きんぎょ	森井美惠子	
	森須　蘭	矢野忠男	
監査役	吉野　精	内田庵茂	
顧　問	秋尾　敏	伊藤希眸	塩野谷仁
	高桑婦美子	武田和郎	武田伸一
	鳴戸奈菜	檜垣梧樓	実籾　繁
	山崎　聰	山中葛子	横須賀洋子
	渡辺　澄		
参　与	青木一夫	大塚弘毅	岡田淑子
	小林俊子	小張直子	直江裕子
	長濵聰子	中村棹舟	なかもと淑子
	藤田守啓	細野一敏	森村文子

平成三十一年度
定期総会・俳句大会開催される

平成三十一年三月十七日（日）千葉市文化センターにおいて平成三十一年度の総会・俳句大会が開催された。並木幹事長の総合司会で、午前十時に渡辺副会長の開会の辞、秋尾会長の挨拶に続き坂間恒子氏を議長に選出。総会は会員参加者七十七名、委任状一六七名で定足数を満たした。

来賓に現代俳句協会幹事長柏田浪雅氏、東京都区幹事長山本敏倖氏、東京都多摩地区事務局長稲吉豊氏、神奈川県会長尾崎竹詩氏の四名の方々をお迎えし、四十周年へ向けて思いを新たにした。

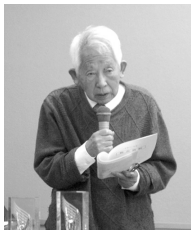
定期総会

総会では七議案（内一～五号議案は枠内・六号議案と七号議案は枠外3頁下段に掲載）について審議され、いずれも可決。檜垣梧樓副会長の閉会の辞を以て終了した。

来賓と顧問の方々

お世話になりました（前会長・副会長の皆さん）

議長 坂間恒子さん


監査役 吉野　精さん

〔第１号議案〕

平成30年度事業報告

1．行　事

⑴ 定期総会および俳句大会
- ① 平成30年度総会　3月18日（日）　出席者 78名　千葉市文化センター
- ② 同上 俳句大会　同上　参加者 82名
- ③ 同上 懇親会　三井ガーデンホテル千葉　参加者 48名

⑵ 吟行会
- 春の吟行会　4月29日（祝日）　千葉市動物公園　会場：千葉市生涯学習センター　参加者 55名
- 秋の吟行会　10月29日（月）　名水百選の城下町・久留里　会場：上総地域交流センター　参加者 63名

⑶ 研究句会
- ① 津田沼研究句会　毎月第2火曜日　午後6時より　津田沼1丁目町会会館　12回実施
- ② 青葉研究句会　毎月第4木曜日　午後1時30分より　千葉市民会館　12回実施　うち7月は吟行会（浜離宮）
- ③ 柏研究句会　毎月第2土曜日　午後1時より 柏市「ハックルベリー」　12回実施

⑷ ミニ吟行会　1月28日（日）　上総一ノ宮　会場：旧寿屋本家　参加者 29名

2．幹 事 会

定例幹事会
- 第1回　1月23日㈫　船橋市勤労市民センター
- 第2回　5月22日㈫　同上
- 第3回　8月28日㈫　同上
- 第4回　11月27日㈫　三井ガーデンホテル千葉

3．会報の発行

128号（3月1日刊）　129号（6月1日刊）
130号（9月1日刊）　131号（12月1日刊）

4．会員数等（平成30年12月31日現在）

会員　338名、　会友　22名、　計360名

【主な異動】
- 入会　10名（新会員 10名、転入会員 0名、新会友 0名）
- 退会　32名（会員 30名、会友 2名）
- （内）物故者・会員 3名　鈴木和子、松沢貞津、堺　房男

〔第６号議案〕規約第６条③の規約改正について
- 改正前　役員の再任を妨げない。ただし、会長および副会長の再任は、１回を原則とする。
- 改正後　役員の再任を妨げない。ただし、会長の再任は１回を原則とする。
- 〈付則〉本改正は平成31年３月17日から実施する。

〔第７号議案〕役員改正について　２頁下段参照

〔第２号議案〕

平成30年度会計報告　［平成30年1月1日～12月31日］

収 入 の 部

（単位：円、％）

費　目	予算額 (a)	実績額 (b)	対比 (b)/(a)	摘　要
前年度繰越金	877,603	877,603	100.0	預金、現金
諸事業収入	1,300,000	1,402,382	107.9	俳句大会、吟行会
助成金収入	730,000	705,900	96.7	本部より
会友費収入	50,000	44,000	88.0	2000×22名
雑　収　入	397	18,008	4,536.0	図書販売費、預金利子
合　計	2,958,000	3,047,893	103.0	

支 出 の 部

（単位：円、％）

費　目	予算額 (a)	実績額 (b)	対比 (b)/(a)	摘　要
会　議　費	100,000	41,115	41.1	幹事会(4回)他
会報発行費	500,000	493,159	98.6	4回発行（送料共）
通　信　費	50,000	39,900	79.8	郵送料 他
行　事　費	1,000,000	1,089,150	108.9	俳句大会、吟行会
印　刷　費	250,000	209,694	83.9	チラシ、総会案内葉書、封筒
研究研修費	50,000	32,153	64.3	ジュニア俳句講座
消耗品費	40,000	39,652	99.1	事務用品
交　通　費	100,000	83,000	83.0	各所出張費
交　際　費	100,000	82,900	82.9	関東ブロック会議 他
雑　費	10,000	7,728	77.3	振込料 他
予　備　費	758,000	0	－	
合　計	2,958,000	2,118,451	71.6	

次年度繰越金

（単位：円）

収　入　合　計	3,047,893
支　出　合　計	2,118,451
次年度繰越金	929,442

財 産 目 録

（単位：円）

千葉興業銀行野田支店	908,274	普通預金
現　金	21,168	
合　計	929,442	

〔第３号議案〕

監査報告書

平成３０年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正当に処理されていることを確認しました。

平成３１年１月２２日

監査役　古野　精

監査役　内田庸成

〔第４号議案〕

平成31年度事業計画（案）

1．行　事

(1) 定期総会
- ①　平成31年度総会　3月17日(日)　千葉市文化センター
- ②　同上　俳句大会　同上
- ③　同上　懇親会　三井ガーデンホテル千葉

(2) 吟行会
- 春の吟行会　4月30日（火）
  - 吟行地：市川・手児奈堂周辺　会場：船橋市勤労市民センター
- 秋の吟行会　10月
  - 吟行地：未定

(3) 研究句会
- ①　津田沼研究句会　毎月第２火曜日　午後６時より　津田沼１丁目町会会館（２句事前投句方式）
- ②　青葉研究句会　毎月第４木曜日　午後１時30分より　千葉市民会館　（３句事前投句方式）
- ③　柏研究句会　毎月第２土曜日　午後１時より　柏市「ハックルベリー」（５句当日投句方式）

(4) ミニ吟行会　1月23日（水）
- 吟行地：成田山新勝寺　会場：成田市国際文化会館

2．幹事会等

(1) 定例幹事会
- 第１回　1月22日(火)　船橋市勤労市民センター
- 第２回　5月21日(火)　同上
- 第３回　8月　未定
- 第４回　11月　未定

臨時幹事会　4月　2日(火)　船橋市勤労市民センター
顧問会議　3月

3．創立40周年記念事業について

随時

4．会報の発行

132号（3月刊）133号（6月刊）134号（9月刊）135号（12月刊）

〔第５号議案〕

平成31年度予算（案）　［平成31年1月1日～12月31日］

収 入 の 部

（単位：円）

費　目	予　算　額	前年度予算額	摘　要
前年度繰越金	929,442	877,603	
諸事業収入	1,300,000	1,300,000	俳句大会、吟行会
助成金収入	700,000	730,000	
会友費収入	44,000	50,000	
雑　収　入	558	397	
合　計	2,974,000	2,958,000	

支 出 の 部

（単位：円）

費　目	予　算　額	前年度予算額	摘　要
会　議　費	70,000	100,000	幹事会他
会報発行費	500,000	500,000	4回発行（送料共）
通　信　費	50,000	50,000	
行　事　費	1,100,000	1,000,000	俳句大会、吟行会
印　刷　費	250,000	250,000	チラシ、総会案内葉書他
研究研修費	50,000	50,000	協会活動の活性化
消耗品費	40,000	40,000	
交　通　費	100,000	100,000	関東ブロック会議 他
交　際　費	100,000	100,000	関東ブロック会議 他
創立40周年特別事業費	150,000	0	
雑　費	10,000	10,000	
予　備　費	554,000	758,000	
合　計	2,974,000	2,958,000	

平成三十一年度 俳句大会

（後援　千葉県教育委員会・千葉市・毎日新聞社・千葉日報社）

新体制で臨んだ俳句大会は午後一時に高木副会長の開会のことばで開始した。大会参加者は来賓の四氏を含め八十七名（内選句のみの参加者が二名）。司会は髙橋（宗）副会長とイザベル事務局次長、披講は清水副幹事長・星野幹事・徳吉幹事長が担当した。進行は予定通り。髙橋（健）副会長の閉会のことばで終了した。写真撮影は、午前午後を通し細野参与が担当。

なお大会後、「三井ガーデンホテル千葉」にて行われた懇親会には、来賓の四氏を含め、四十六名が参加、総会と俳句大会の成功を祝った。司会は東、白木両幹事。

俳句大会の成績は左記の通り。

【事前投句の部】

〈入賞者作品〉

●千葉県知事賞

饗にたっぷり非常用の月光　浪岡　玄

●千葉県現代俳句協会賞

帰り花しずかに絶望しておりぬ　黒岡　洋子

●千葉市長賞

かき氷崩す昭和が見えるまで　青木　一夫

●毎日新聞社賞

長生きをして煮凝になっている　星野　一恵

【席題の部】　席題「前」「巣箱」

〈入賞者作品〉（二句の合計点。掲載句は二句の内の一句）

●千葉県現代俳句協会会長賞

春愁をけって鶏前かがみ　山中とみ子

●千葉県教育委員会教育長賞

前衛といい漂泊といい鳥雲に　清水　伶

●千葉日報社賞

逃水の前父がいて母もいる　渡辺　澄

〈特別選者特選句〉

（秋尾敏特選）

臓器移植のごとくブリキの巣箱　小川トシ子

（柏田浪雅特選）

もう一つ巣箱ふやして核家族　山中とみ子

（山本敏倖特選）

黄梅や未生以前のうす明かり　長濵　聰子

（稲吉豊特選）

前列は人が少ない桜冷え　内田　庵茂

（尾崎竹詩特選）

父親の前ではレディー蔦芽吹く　伊藤　希眸

（伊藤希眸特選）

身のほどの巣箱に眠り羽化をせり　大見　充子

（塩野谷仁特選）

パスカルが呼ぶから巣箱掛けに行く　柏田　浪雅

（武田伸一特選）

前漢も後漢も滅びつちふれり　越野　雄治

（山中葛子特選）

ごそごそと日の余りたる巣箱かな　岡田　春人

（横須賀洋子特選）

家の前面妖な春が立っていた　楠見　惠子

（高木一惠特選）

前衛といい漂泊といい鳥雲に　清水　伶

（檜垣梧樓特選）

巣箱作ってくれた見知らぬ男かな　斉木　ギニ

（渡辺澄特選）

永遠を巣箱に置いて飛び立ちぬ　小林　実

（並木邑人特選）

後ろ前のトックリセーターのよう君は　森村　文子

〈四～三十位入賞者作品〉

少年と蛇に愛されている巣箱　森村　文子

それぞれに巣箱を提げて老いゆくか　越野　雄治

夢の世の夢のあたりが巣箱です　細根　栞

巣箱より覗いていたり子規と虚子　長井　寛

三月の前後も鶴を折っている　青木　一夫

難民の子等に巣箱の眩しかり　髙橋　由樹

臥す母の目線に合わせ巣箱吊る　高橋富久江

言祝ぐは前の世のこと蝌蚪の国　柏田　浪雅

紅椿前世で出会った痕がある　羽村美和子

きっと蝸牛前列の空席　石井紀美子

ひらがなの巣箱の穴の湿りかな　大川　竜水

デュエットの準備完了巣箱吊る　長濵　聰子

春泥を跳んで前世思い出す　岡田　春人

ひとり居の家の出入りや巣箱めく　山﨑　幸子

鳥の居ぬ老人ホームの巣箱かな　内田　庵茂

無国籍の男がのぞく巣箱かな　坂間　恒子

身の内の孤島に巣箱かかげけり　山中　葛子

現俳のここを巣箱と思いけり　秋尾　敏

諍ひの始めは国境の巣箱　髙橋　健文
曲線の終点巣箱生きている　小林　俊子
春光のかすかに軋むジャンプ前　高野　春子
巣箱吊るこの村の過去かがやかせ　椎名　鳳人
一宿一飯下総の巣箱　岡田　淑子
おいさくらそんなに前に出ては駄目　小林　実
巣箱といふ小未知の宝物スイッチ入る　伊藤　希眸
薄目して見れば始祖鳥夜明け前　大見　充子
ちょっとずつちょっとずつ前光る春　小川トシ子

〈その他作品　受付順〉

目借時前頭葉は眠らせぬ　徳吉洋二郎
手作りの巣箱一度も空を見ず　三須　民惠
前頭葉少しほぐれて卒業す　吉田　耕史
坂道は空への階段樹の巣箱　髙橋　宗史
山頭火ゆく前もうしろも夏木立　井上けい子
前向思考さてどうする北窓明け　上野　紫泉
改号を知らずはやばや巣箱出る　横須賀洋子
世の中は丸いものなの巣箱から　尾崎　竹詩
巣箱並ぶ汚染土の塚遠巻きに　高木　一惠
哲学の道前にうしろに桜しべ　星野　一惠
巣箱に入れる食料不自由少年期　細野　一敏
幸福の満ちみつ巣箱君去りぬ　小野　功
総の森まあるい巣箱たから箱　なかもと淑子
荒々と巣箱残りたり春寒　檜垣　梧樓
大地より芽吹く以前の鼓動かな　山本　敏倖
孵卵器やさくら霞の前立腺　並木　邑人
平成の終り巣箱に政治の膿　東　國人
巣箱より希望の飛翔安房上総　稲吉　豊
ハンガーの赤いっぽんの巣箱かな　塩野谷　仁

日向ぼこ前の世もかく足伸ばし　武田　伸一
食前の祈り三行春の暁　イザベル真央
出巣箱非戦の空を引寄せる　林　阿愚林
両の手のいつか前足桜冷え　池田　博臣
主亡き庭の巣箱の声が呼ぶ　福田志津子
こだわりの泥の巣箱へ来るを待つ　池田　幸
我が巣箱要塞のごと鬼瓦　髙橋　博
木に巣箱地上に除染廃棄物　林　ゆみ
敵前逃亡それはないぜよ春の雷　圍　喜江
巣箱よりわたしは火星めざします　吉野　精
巣箱より見ゆる鳥の眼のけしき　森井美惠子
計らずも風に落ちたる巣鳥かな　林　哲
紙と木の我が家の栄え雀の巣　平山　武彦
念入りに土をかぶせて猫前へ　片岡伊つ美
前年度からの引継ぎ春動く　野口　京子
春愁がはじまる前列に着く　加藤　法子
立前を哀れに思すさくら貝　白木　暢子

西風に巣箱の壊れゆく葉蔭　泉　志眞子
雀来て店子違いの巣箱かな　矢野　忠男
飛ぶ構えまたあらためて巣箱中　森　孝子
巣箱見て牛乳を買ひに行く朝　増田　豊子
巣箱から出てゆけぬ子いて九条　金子　未完
宇宙への前衛とならん揚雲雀　浪岡　玄
前世はクリオネだった桜鯛　鍬守　裕子
少子高齢転入者なし巣箱かな　松﨑あきら
信じます君を風を巣箱の時間　たけなか華那
ふらここや前山に足蹴りあげり　小多田文子
前世はアザラシだった春の夢　鈴木まんぼう
雨の匂いの濃くなってゆく空巣箱　森須　蘭
紫木蓮前世は獏だったらし　鈴木　瑩子
まどろみに濁れる川を花の雨　徳田　悠子
つばくろや巣箱はいらぬ納屋の中　金子　こう
夫逝きて朽ちたる巣箱のこりけり　袴田　菊子
高齢の春の下着は後前　棗　楕伊

千葉県知事賞　浪岡玄さんと秋尾前会長

席題の部入賞　渡辺さん、山中さん、清水さん

選句も楽し

期待と緊張、披講が始まります

三好美穂子

ぎりぎりの攻防桜の芽に譲る
初夏の楔海への放浪記
荒縄で括る涼しさ雲遠し
目薬の一滴萩のこぼれそう
筆談の窓拭きクリスマスキャロル

山崎　公子

鵯の棲む紅梅に蒼き声
冬彩のはにわを照らす僧ひとり
ぶらさがる晩夏のリズムからすうり
畔の端煙とうとう秋の暮
紅白にひらく梅あり青落とす

松岡　節子

北前船の底には石よ雁渡し
幻想を刺すざわめきや遠花火
吾の老いに寄り添ふ我よ桐の花
ひまわりや夜間中学募集開始
鳥の巣はピーターパンの帰る処

若林　佐嗣

どの石も影はみ仏寒の月
妻という不思議な器椢明り
早春の光分け合うランドセル
うららかやしがらみ抜ける観覧車
葱坊主大地を母に陽を父に

無　子

秋遍路二十二歳のまま逝かれ
昨日まで幸せだつた赤とんぼ
ただ声を聞きたいだけの冬日向
冬枯れの芝草を踏む　痛いか
日の温しアンリ・ラパンのダイニング

渡辺　澄

十二月駅を背にして家路あり
野遊びのいちにちはれて書いて消す
立つために手をつく釣瓶落しかな
金魚の死転校生が泣いている
青き踏む若き兵士の征きし道

吉野　精

人間よ僕はたんぽぽ戦やめよ
たんぽぽやすべての道はローマへと
たんぽぽ僕ら道譲り合い平和
アベックの未來見つめるたんぽぽ黄
たんぽぽの絮少年めざす火星

秋葉　紅陽

手の届く所に句帳去年今年
春の日の仕事着脱いで今日終り
短冊に楷書の文字や星祭
ながれゆく静かな時間十三夜
農道を亀裂の走る大暑かな

市川ふみを

針先の静脈さぐる寒土用
裏山は父の遊び場茸籠
青梅や産毛の光る反抗期
黒南風やハシビロコウの黙秘権
葬儀果てただ猫の子をなでてゐる

阿部さくら

春霞ゆびの記憶のショパン弾く
寝ころべば空落ちてくる鼓草
亀鳴くや食パンの耳四つあり
白夜かな眼をもたぬ魚がゐる
銀木犀縫はず終ひの夫の衣

第56回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は
7月31日
（必着）

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催して行う伝統のある大会です。協会員に限らずどなたでも参加できますから、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。

今回は、新元号「令和」が題詠になっています。
応募規定詳細は「現代俳句」４月号をご参照ください。

諸家近詠

池田　博臣

諾いて安房のはずれの金盞花
両の手のいつか前足桜冷え
あしあとのうしろあしおと夏の雲
記憶喪失てのひらのさくらんぼ
秋の海遠きにしかと投函音

飯島　昭子

芽吹く樹やひと雨ごとに朱を増せり
ものの芽のひとつひとつに語りかけ
春光やエンディングノート買つてみる
春愁や親族といふもの問ふてみる
雨過ぎし光の春に嬰生まる

秋谷　菊野

病院で過ごす一日や花の冷え
日向ぼこひとりふたりと友がゆく
心音を聴く妊婦さん花の昼
離農かな刈田に蒲団かけてゆく
どこへゆくの裸木の職務質問

池田　幸

句座の輪へ小出治重涅槃西風
指先の仮想世界の余寒かな
南天の花に預けし夢の事
行く夏の雲悠悠と縄文展
電柱にカラスのいじめ冷えし朝

山中とみ子

遮断機の下りて朧夜まっ二つ
蝶生れてそこより空気軽くなる
葱坊主満員電車にいて一人
春愁をけって鶏前かがみ
切れそうな縁仲もつ豆の花

山端かすみ

小春日の中から猫の手が伸びる
関税の話などして木の芽和
天神に横書きの絵馬風光る
一山の桜吹雪を月が曳く
亡き友の秀句の束や花篝

山中　頼子

罠かけて罠に嵌る子草青む
すべり台しんがりにつくつくしん坊
汗の衣脱いで羽化するおとこかな
大志には大小ありて木の実熟る
新元号話題咲かせて春惜しむ

東　國人

戦争が鎮座するどぶ汁の底
大白鳥管弦楽となってゆく
鴛鴦鴛鴦ただ包丁を研いでいる
都鳥電車のドアのふっと閉まる
獏に夢全部食わせて卒業す

石﨑多寿子

初ざくら古刹の天を独り占め
さくら咲き遠くに風車巡りをり
鳶消えて眼前のさくら満開に
花万朶双児の眠る乳母車
満開のさくらがしんと夜を見張る

渡邉　竹庵

秋めくやボタンで開くローカル線
しばらくは妻の訛りと蕪鮨
義手外し寝台列車から銀河
タイマーを少し遅らせ沈丁花
朧夜やビルに居酒屋麻雀屋

石井紀美子

待春の空へカウベル高く振る
立春やどの抽出しを開けようか
田という田くちあけしまま目借どき
円周率伸ばす花菜の海の風
桜満開非常口が危ない

秋尾　敏

源さんは株式会社磯開き
月日貝忘れられた俳誌もある
ご近所のために静かな春休み
黒潮となって朧に至りけり
バイク息んで猫の子を生み落とす

吉岡　一三

祝祭日囀りの下身じろがず
陽炎へ救急車消防車没す
一本の赤いチューリップが自慢
人去りて一列の葱坊主
脇見飛行の蝶々顔面を撲つ

山中　葛子

霧霧霧何事もまだ起こらざる
老ふたり川霧一〇〇トンどう曳くか
花の寺白い満月それはそれは
ひとしきり他界の螢のまじる雪
忘れたい障子の穴に蝶を貼る

横須賀洋子

永遠の欠席届鳥雲に
朧夜の散歩にわたすハンチング
遅れきて見たような嘘花七分
学校へ行きたかった子卒業す
すみれのようマリリンモンロー揺れて

私の感銘句

	作者名	号	頁
冬瓜をすっぽり抱いて考える	横須賀洋子		128 3
もう何も言うことの無き冬木立	加藤　法子		128 4
春昼の木々に声なし兜太亡し	塩野谷　仁		129 8
瞬（まばた）きのこぼれやすくて蝶の昼	清水　伶		129 8
年輪の育つ音して山眠る	國分　三徳		129 9
朧の夜優しい人から消えてゆく	小張　直子		129 9
だいじょうぶは魔法の言葉あたたかし	黒川　秀夫		129 10
本能と遊び疲れてきりぎりす	長濵　聰子		130 3
海の日の海を遠くに私はかもめ	中村　冬美		130 4
ジャズは朱夏自由席なら空いている	富澤さち子		131 4
春昼の木々に声なし兜太亡し	**塩野谷　仁**		
金子兜太さんの死去に心を痛めました。俳壇の重鎮だった金子さんをしのび、業績の顕彰も展開されています。「春昼の木々に声なし兜太亡し」の上五、中七の言葉の響きの重さに感服し、下五、兜太亡し、がさらに偉大なる人への哀悼を感じます。			
森の教室木槌にとまる黒揚羽	尾形ゆきお		128 4
春昼の木々に声なし兜太亡し	塩野谷　仁		129 8
尼寺という雪うさぎ雪うさぎ	清水　伶		129 8
印旛沼眠る男の如く冬	久保　筑峯		129 9
巻貝となる夏の日を耳に当つ	杉山真佐子		129 10
東向くひまわり西向く荒凡夫	長井　寛		130 3
定住漂泊おぼろ狐の尾の千切れ	高木　一惠		130 4
きさらぎの石牟礼道子干潟ゆく	檜垣　梧樓		131 4
跫音は我が倒影か雪暮れて	並木　邑人		131 4
マチュピチュの絵葉書がくる小鳥来る	東　公子		131 5
雛の夜は雛の顔して出てゆかん	山﨑　政江		128 2
何となく五体満足初湯かな	岡田　春人		128 3
春耕のしっかと大地輝かす	金子　敏		128 4
明け方の夢にとびこむ猫の恋	小野　裕文		129 8
地の塩とほど遠く居て仏の座	下村　洋子		129 9
みどりごの真水のやうな汗ぬぐふ	千葉　信子		130 2
何しても器用になれず新茶汲む	中澤　一紅		130 3
如月の骨のきれいな魚を割く	中村　冬美		130 4
人間を脱ぎ万緑のど真ん中	徳吉洋二郎		131 4
自戒ほろほろ朝ぐもりの茶漬	高野　春子		131 5
好日の眠きふりしてかたつむり	大見　充子		128 3
春野を歩くさびしがるてのひらと	岡田　春人		128 3
北斎や両国橋に葱下げて	岡田　淑子		128 4
群衆の端っこにいて火神鳴	小川トシ子		128 4
背を押され別の自分になる寒さ	小林　実		129 9
朧の夜優しい人から消えてゆく	小張　直子		129 9
一月が膨らんでくる紙袋	窪田　俊作		129 10
加齢ふと眠ってばかりいる金魚	田口満代子		130 2
やや揺れて貝殻草の吐くことば	東　公子		131 5
白鷺の声より男こぼれ来て	羽村美和子		131 5
朧の夜優しい人から消えてゆく	**小張　直子**		
昨年親友が旅立ちましたのでこの句にひかれました。朧の夜の措辞が、未だに死んだことが信じられなくて朧であってほしい…私の気持ちを言い当てています。俳句という友を得て、生活の一部となっており、見たものをあからさまにならず、さりげなくにんげんの心の奥にある寂しさ等を呟く句を作りたいと思っています。			
冬瓜をすっぽり抱いて考える	横須賀洋子		128 3
音高く花の散る夜キリンの死	大見　充子		128 3
りんご噛む宇宙はまるいものばかり	岡田　淑子		128 4
面売りの面立てて売る花ぐもり	加藤　法子		128 4
春の野の人に曇天熟れてゆく	塩野谷　仁		129 8
深爪の男あつまる桃の花	清水　伶		129 8
友が来る枯野に鬼の面つけて	小林　実		129 9
麦秋の肩の重さを午後という	黒澤　雅代		129 9
炎天を抜け東京を抜けられず	徳吉洋二郎		131 4
跫音は我が倒影か雪暮れて	並木　邑人		131 4
炎天を抜け東京を抜けられず	**徳吉洋二郎**		
連日の猛暑日が続く近年の東京の夏。その炎天を抜け出したつもりであったが、一極集中の進む東京、人情味は薄いが人間にとっては極めて便利な東京、そして、作者は郊外に居を構え数十年間通勤を続けたかもしれない東京。その東京の持つ熱気からは未だ抜け出せないでいる、焦燥感にも似たものを感じさせる佳句です。			
国難とは言わぬ借金霧深む	秋山　勝男		128 2
鰯雲歩けるうちは靴を買う	井上きよ美		128 2
かと言って無下には出来ず青大将	加藤　法子		128 4
巨星墜つこの淋しさを金縷梅咲く	塩野谷　仁		129 8
逝く春の鳴咽か雨の降りやまず	小張　直子		129 9
五七五という化け物や四月馬鹿	椎名　鳳人		129 10
父と子の黙の深さや蟬時雨	長濵　聰子		130 3
水無月を眠る喪った日を眠る	直江　裕子		130 3
百年はすでに来てをり桜守	髙橋　健文		130 4
きさらぎの石牟礼道子干潟ゆく	檜垣　梧樓		131 4

澤田　寿一

鈴木　瑩子

池田　博臣

髙橋　宗史

父と子の黙の深さや蟬時雨　長濱　聰子

在りし日の私を歌った句だと錯覚した。日本人に八月は忘れられぬ季節だが、皆の八月と共に私の個の八月がある。私は青春寸前の少年、父に「馬鹿な僕を生んだのは誰か。僕は生まれたくて生まれて来たのではない」と云った経緯があり反抗した。結果は？　胸ぐらを摑まれ「貴様」と徹底的に土下座させられた。暴力の前で屈服した私は己れの誤りに気付いたらしかった。青空を見上げ、誓った。いつもの如く蟬が鳴き、ふたりの沈黙が続いた。

大地　節子

決りなき落ちた椿の並び順　小池美佐子　1302
更衣過去はそのままついて来る　泉　志眞子　1302
人の顔って眼のことさ冬の星　髙橋　宗史　1302
天と地の倒錯枝垂れ桜かな　髙橋　宗史　1302
みどりごの真水のやうな汗ぬぐふ　千葉　信子　1302
土竜の子そこは野すみれ咲く所　髙橋由紀子　1303
水中花女の余熱尽きるまで　長濱　聰子　1303
釣人の空身で帰る稲穂波　中里　結　1303
流星を見にまた来よと父母の墓　関根　信三　1303
発想は昼寝の中に逃げこめり　武田　和郎　1303
人の顔って眼のことさ冬の星　髙橋　宗史

先ず五・七・五になっていないアンバランス感。次に「人の顔って眼のことさ」ときっぱり言い切る大胆さ。そして眼の輝きを四季の中でも格別美しい冬の夜空の星を持ってきたスケールの大きさに釘付けになりました。

また同じ作者で枝垂れ桜を天と地の倒錯と表現する等、新米の私には考えもつかない作品なのでとても感銘を受けました。

中嶋　三雄

冬瓜をすっぽり抱いて考える　横須賀洋子　1283
矯められて月の松とや涅槃西風　興津　恭子　1283
北斎や両国橋に葱下げて　岡田　淑子　1284
瞬(まばた)きのこぼれやすくて蝶の昼　清水　伶　1298
本能と遊び疲れてきりぎりす　長濱　聰子　1303
炎天に影黒くなる白くなる　高桑婦美子　1304
定住漂泊おぼろ狐の尾の千切れ　高木　一惠　1304
蒙古斑あさって春が来るという　なかもと淑子　1304
陽炎に組みゆく鉄骨大都会　徳吉洋二郎　1314
有縁あれば辻遠もありぬ弥生尽　檜垣　梧樓　1314

森　孝子

愚痴一つまあるく抱いて夜の桃　山中とみ子　1282
冬瓜をすっぽり抱いて考える　横須賀洋子　1283
巨星墜つこの淋しさを金縷梅咲く　塩野谷　仁　1298
正論のどこか窮屈石榴の実　黒澤　雅代　1299
組紐のかたりことりと伸びて春　高橋富久江　1302
父と子の黙の深さや蟬時雨　長濱　聰子　1303
父の顔にどこか似て来る盆の月　坂本千惠子　1304
小鳥来る誇らしく凡人であり　荒木　洋子　1314
生きてこそ愛でる愛でらるヒト・サクラ　鳴戸　奈菜　1315
行けそうでゆけぬ秋思の旅鞄　袴田　菊子　1315

飯島　昭子

冬瓜をすっぽり抱いて考える　横須賀洋子　1283
原子炉の見ゆるところに桜咲く　川又　優　1284
かなかなや遺品の整理また日延べ　小野　裕文　1298
八月や無口な父がしゃべりだす　重田　忠雄　1299
菩薩にも生命線あり涅槃西風　髙橋由紀子　1303
歳晩や書架に古びし資本論　関根　信三　1303

《会員・会友の近況》

・春生れの私はまた一つ歳を重ね日本は元号が新しくなります。平成を引き摺らないと決めました。踏み出す一歩によき風が吹きますように。（無子）

・お世話になります。私、九十四歳、おかげさまで元気にやっております。（吉野　精）

・月に二回、千葉信子先生のご指導を受けながら句会に参加し勉強しています。句友の仲間の皆様の刺激を受け日々新鮮な気持で頑張っています。（阿部さくら）

・膝痛で吟行も休んでいましたが手術の決心をしました。不安ですが良いことを思い浮かべ、頑張ろうと思います。（飯島　昭子）

・昨年は腰痛膝痛目眩と絶不調でしたが、今年は元気をとりもどし、句作に励んでおります。三月の千葉県俳句大会で佳作となり気を良くしています。（秋谷　菊野）

・三月十九日源流主宰小出治重先生が亡くなられました。幹事を中心に会の活動を継続予定です。（池田　幸）

・今の所元気にしております。今年は俳句頑張りたいと思います。（山端かすみ）

・教職を離れて三十年。傘寿を迎え老いとのたたかいの日々ですが、自分の句を振り返るとその殆どが子供がテーマになっています。日本いや世界の子供が平和に暮らせることを願う日々です。（山中　賴子）

・先般の役員改選で企画部長など引き受けてしまいました。仕事と協会の両立は大変難しく胃の痛む日々です。しかし引き受けた以上は何とかうまく回れるよう努めるつもりですので、皆様ご協力お願い申しあげます。（東　國人）

吾亦紅静かに主張通しけり　日野　葉子　1314
蕗煮れば祖母の居さうな厨かな　福田志津子　1314
流れいく岩波文庫麦の秋　林　阿愚林　1315
長き夜の星に余生の夢語る　林　紀之介　1315

なかもと淑子

雛の夜は雛の顔して出てゆかん　山﨑　政江　1282
愚痴一つまあるく抱いて夜の桃　山中とみ子　1282
また続く晩年秋は気まぐれ　横須賀洋子　1283
形なきものまで暮るる寒の入　下村　洋子　1299
名画座は総天然色春深し　中嶋　三雄　1303
春あられ番場峠のはずみけり　永井　奈々　1303
春寒や握り返さぬ手を握る　中山　皓雪　1314
抽斗に塩あめ残る晩夏かな　浪本　恵子　1314
海の墓標飛び魚の翅透くところ　羽村美和子　1315
新豆腐水に無音の光りあり　野口　京子　1315

伊藤　希眸

また続く晩年秋は気まぐれ　横須賀洋子　1283
春野を歩くさびしがるてのひらと　岡田　春人　1283
行く春やみぞおちに染む瞽女の三味　岡山　敦子　1284
滝飛沫消しても消しても罪一つ　戸邉　光一　1302
東向くひまわり西向く荒凡夫　長井　寛　1303
待つ人もなき岩蔭の月見草　中村　棹舟　1304
炎天に影黒くなる白くなる　高桑婦美子　1304
定住漂泊おぼろ狐の尾の千切れ　高木　一惠　1304
自戒ほろほろ朝ぐもりの茶漬　高野　春子　1315
新豆腐水に無音の光りあり　野口　京子　1315

横須賀洋子

まだ続く晩年秋は気まぐれ

　晩年とは何時から言うのか、人各々の思考、寿命というものに動かされるかと思うが普通に考えると七十代に入ると晩年と思うかも。この頃は長命になり百歳人生が当然と考えられ、八十五歳位が終焉と思っていたのに、何時まで晩年という歩みをしなければならないのか。でも人生は気まぐれ、秋のように突然風雨や霜、美しい景色を見せてくれる。人生七転び八起き。生きる喜びと不安を表白している。

興津　恭子

蓮にまだ枯れる勢い摩天楼　山﨑　政江　1282
胸中に滾る川あり昼螢　金子　敏　1284
鳶の笛四温の岬をふくらます　佐々木　禎　1299
正論のどこか窮屈石榴の実　黒澤　雅代　1299
十薬の群れる清貧あめふらし　下村　洋子　1299
春愁や見えざるものに吾が背中　椎名　鳳人　12910
遥かなる雪解水から紀行文　小池美佐子　1302
菩薩にも生命線あり涅槃西風　髙橋由紀子　1303
早乙女や支流束なす日田盆地　中嶋　三雄　1303
夕端居猫に教わる風の道　富澤ムツ子　1304

里見　さち

妊りて日傘小さくなりにけり　橋口　久子　1282
蝌蚪に足ラストダンスの靴がない　加倉井允子　1283
原子炉の見ゆるところに桜咲く　川又　優　1284
真夜中の椿ひとつは月に落つ　塩野谷　仁　1298
しろがねの旋律からす瓜の花　千葉　信子　1302
終わったとどこかで思う夕端居　直江　裕子　1303
東向くひまわり西向く荒凡夫　長井　寛　1303
物言はぬ人に髭伸ぶ日脚伸ぶ　中山　皓雪　1314
降る雪に脈うつやうな間のありぬ　林　みさき　13113
夜の凍てを正座して読む抑留記　吉田　耕史　13113

・私が所属する「きみさらず俳句会」は、一昨年に講師益田清先生が、今年四月には三苫知夫様が逝去され、また大きな柱を失ってしまいました。当会は発足以来、名称こそ変りましたが四十七年になります。今後も俳句の火を、絆を、絶やさぬようの思いでいます。（石井紀美子）

■四十周年記念基金の募集

千葉県現代俳句協会の四十周年記念事業を円滑に実施するため、基金を拠出していただきたく、お願い申し上げます。

一　期間　令和元年六月～二年三月十五日
二　目標金額　百万円
三　一口の金額　千円（何口でも可）
四　払い込み先　ゆうちょ銀行
　口座　００２３０・６・１０６２３８
　加入者名　千葉県現代俳句協会
　　四十周年記念基金募集委員会

払込には払込用紙を用意しています。ゆうちょ銀行のＡＴＭをご利用頂けると幸甚です。なお「手数料」は加入者負担としました。
　また、吟行会や句会で役員に直接ご寄付いただいても結構です。お支払いの方の名前は「現代俳句千葉」に掲載させていただきます。
　基金の応募につきましては、同封の振込用紙でお願いいたします。

基金募集委員会委員長　髙橋　宗史

春の吟行会

古代余情に浸り万葉の時代をたどる

「市川市　手児奈霊神堂」

会場　船橋市勤労市民センター　平成三十一年四月三十日（休日）

平成最後の日となった四月三十日、真間の手児奈ゆかりの地へ、吟行に出掛けた。真間の手児奈は、高橋虫麻呂や山部赤人らによって『万葉集』にも詠われている、哀しい伝説の美女である。

コース案内は、企画部の方々。市川駅北口より、真間山に続く大門通りを歩く。大門通りは、別名万葉の道。その名のとおり市川の書家に揮毫された『万葉集』の歌のパネルが、民家の壁の至る所に貼られている。読む度、歩く度に往時へ誘われて行く。

真間川の入江橋を渡るとすぐに、赤い欄干の小さな継橋がある。この辺りはかつての入江跡で、その中の洲から洲へ架けられたのが継橋という。「真間の入江」「真間の継橋」の歌なども読みながら、万葉の道を進む。

真間山弘法寺の石段の手前に、手児奈霊神堂がある。あまりの美しさに多くの男性に求婚されるが、自分の為に人々が争うのを愁い、入水したという、手児奈が祀られている。霊神堂の斜向かいの亀井院には、手児奈が水を汲んだという井戸がある。虫麻呂は、「葛飾の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手児奈し思ほゆ」と詠んでいる。この寺には北原白秋がかつて滞在し、境内には歌碑もある。

弘法寺の急な石段を登ると、まず群生の著莪が出迎えてくれた。弘法寺は行基が建立したと言われる古刹である。運慶作と伝えられる仁王像の門を潜ると、伏姫桜という、樹齢四百年の枝垂れ桜がある。朝方の雨に瑞々しさを増した葉桜は、一段と輝いていた。境内には、小林一茶、水原秋桜子、富安風生の句碑がある。

投句締め切りがあるので、ゆかしさを断ち切り駅へ向かう。船橋市勤労市民センターにて、十一時三十分より受付。句会に先立ち、先頃逝去された小出治重・三苫知夫両顧問に、黙祷が捧げられた。その後、十六時過ぎまで、熱の籠もった句会が続いた。参加者六十六名。

新元号令和の由来も相まって、万葉の時代へたっぷりと思いを馳せた一日だった。

司会　東　國人

披講　小林　実・清水　伶・星野一惠

（羽村美和子 記）

真間の継橋

伝説の美女を祀る手児奈霊神堂

真間の井戸を覗く

〔一～二十位入賞者作品〕（二句のうち一句）

①山椒魚ほどに濡れいて涙石　清水　伶
②二つ世にかかる継橋木の芽雨　中里　結
③葉桜や君はそのまま生き給え　吉田　耕史
④磐石を登るかたつむりの筋力　長濵　聰子
⑤仏心の寄り添ってくる樟若葉　黒澤　雅代
⑥行く春の美貌の石をふところに　羽村美和子
⑦階段は煩悩の数夏木立　加藤　法子
⑧どうしても字余りになる昭和の日　小林　実

⑨ 平成限りの恋うた真間の牛蛙　高木　一惠
⑩ 春愁の手児奈の覗く水鏡　長井　寛
⑪ 春霖の橋平成が一人ぼっち　並木　邑人
⑫ 言ひ聞かせゐるやうに降る菜種梅雨　増田　豊子
⑬ ひやひやと真間の井覗き薄暑なる　山﨑　幸子
⑭ 案内は射干鐘撞堂へはゆっくり来い　たけなか華那
⑮ 万の言葉に水汲ましめよ春の果　諸藤留美子
⑯ 二、三歩で渡る継ぎ橋昭和の日　鈴木　瑩子
⑰ 春雨のとどかぬ真間の井の深み　松本　千花
⑱ つぎはしを渡り万葉の世へ暮春　内田　庵茂
⑲ たんぽぽは子犬の顔で雨上がり　赤羽根めぐみ
⑳ 弘法寺の暗き杜より春ショール　小門　則子

〔特別選者特選句〕

（並木邑人会長　特選）
真間の井の中まで届け藤一枝　遠藤　寛子

（秋尾敏顧問　特選）
燕来る葛根湯はゆっくり効き　越野　雄治

（檜垣梧樓顧問　特選）
虫麻呂も赤人も来よ青しぐれ　清水　伶

（高木一惠副会長　特選）
万の言葉に水汲ましめよ春の果　諸藤留美子

（髙橋健文副会長　特選）
虫麻呂も赤人も来よ青しぐれ　清水　伶

（髙橋宗史副会長　特選）
忘却の海よつぎはしは春暮れて　諸藤留美子

（徳吉洋二郎幹事長　特選）
樟若葉手児奈の雨の非定型　並木　邑人

〔その他作品〕（二句のうち一句、受付順）

勃然と闇の新緑真間の峰　池田　博臣
雨の藤己が炎点さずに　島田　翠松
春泥の靴跡あまた手児奈堂　渡邉　安雄
亀鳴くや真間の手児奈の井の辺り　檜垣　梧樓
真間山の緑こんもり春時雨　三宅たくみ
葉桜の枝垂れて届く令和かな　平岡　育也
忽然と万葉の里初つばめ　徳吉洋二郎
春の雨雲真間川の絶対値　秋尾　敏
若葉して幾世映せり寺の池　笈沼　早苗
真間の里踏む往来の柏餅　小林　俊子
若葉雨すってんころり女坂　富澤ムツ子
晩春の雨は水面を濡らしけり　髙橋　健文
プラトニックラブ手児奈の道は青葉雨　髙橋　宗史
参道の壁の万葉夏隣　島　隆史
五歩で行く真間のつぎはしつつじ咲く　髙橋　博
見えますか真間の手児奈よ春の今　林　哲
元年へ錨あげるや夏隣　平山　武彦
卯の花腐し真間のつぎはし渡らむか　大澤ひろみ
手児奈汲む井筒静かな暮の春　三浦　侃
片思ひなれど生きぬく春の川　岡田　春人
退位は重く手児奈の恋は朧　田村　隆雄
東歌ならぬ都の山法師　斎藤　和子
靴底やわら万葉の若葉雨　安田　政子
湿る階段さみどりの名刹へ　山口　明
葛飾や手こぎにのせる白子干　岡田　淑子
吟行の試行錯誤やつばくらめ　大薗　智子
継ぎ橋や生き難き世の蝶の影　伊与田すみ
春霖や手児奈の嗚咽かもしれぬ　上野　紫泉
花水木継橋渡る風に色　矢野　忠男
深く入る亀鳴いたやも手児奈堂　なかもと淑子
こでまりの白を手児奈娘こぼせしか　林　ゆみ
五月来る乙女手児奈は残夢なり　久野　康子
歌碑匂うジャスミン匂う雨後の街　森須　蘭
夏へ令和へ繋ぐつぎはし雨の使者　石井紀美子
新樹光いまだ手児奈を追い求め　下村　洋子
はつなつの風のメロディ手児奈絵馬　森井美惠子
万葉の恋を湿らす春の雨　星野　一惠
卯波立つ手児奈の哀史ひらくたび　木之下みゆき
真間手児奈缶チューハイを飲む四月　東　國人
真間山の参道示すや藤の花　山﨑　和久
手児奈いま仏陀に嫁ぐ春嵐　松崎あきら
平成見届け石段高く著莪の花　細野　一敏
不器用な手児奈の姫や春惜しむ　林　阿愚林
シャガ咲けば吽形像の止める息　高野　義康

上位入賞の
中里さん・清水さん・吉田さんと並木会長

❑❑ 津田沼研究句会報告 ❑❑

（於：津田沼一丁目町会会館）

●第三二一回（平成三十一年二月十二日）

司会　池田　博臣

将軍の厠を覗く実南天　村上　澄子
脳を眠らせ建国記念の日　白木　暢子
春キャベツ一枚ずつのルンバかな　岡田　淑子
豆撒きや食べきれぬ数生きてきた　吉野　精
あげ底の玉手箱です春の雷　横須賀洋子
もう居ない父似兄似の追儺鬼　徳吉洋二郎
青鮫忌月光背負ひ一茶読む　佐藤　晏行
野天風呂息するような斑雪山　なかもと淑子
薄氷をひょいひょいひょいと跨ぐ吾子　金子　未完
取りこわし始まる家の庭蜜柑　股野　久子
春寒や房総半島あるがまま　池田　博臣
節分や青鬼のごとサラダ巻　高木　一惠
春一番グリーンカレーとガパオめし　檜垣　梧樓

●第三二二回（平成三十一年三月十二日）

司会　徳吉洋二郎

啓蟄や臍の緒乾く桐の箱　前島きんや
永遠の欠席届鳥雲に　横須賀洋子
白魚の笊より逃がる反戦歌　岡田　淑子
駅前の斎場ふたつ春の雪　イザベル真央
晏駕してきさらぎの空ゆき止まり　池田　博臣
ゆらと湯豆腐思い出せぬことしきり　なかもと淑子
春寒の晏子捧げ銃して送らんか　檜垣　梧樓
本流をはなれ木の橋日永橋　高木　一惠
春の星「私の好みは」をもう一度　徳吉洋二郎
梅ま白格納庫より機体曳く　股野　久子
竜天に登り私の誕生日　深山きんぎょ
煮凝りや腹のふくるる黙秘権　村上　澄子
三月や薄紫を胸に挿す　白木　暢子
ひなまつり女はひとりレース編む　吉野　精
村ひとつそっくり亡び春うらら　小林　実
おえら様の意向を探る鰆五郎　金子　未完

●第三二三回（平成三十一年四月九日）

司会　伊与田すみ

水飴が鶏になる遅日かな　星野　一惠
四月の梅万葉学徒晏行は　檜垣　梧樓
学校へ行きたかった子卒業す　横須賀洋子
上げた手をゆっくり下ろせばどかなり　金子　未完
行きもせず心の奥の花疲れ　なかもと淑子
花は葉に離婚届の三文判　徳吉洋二郎
いつまでの延命治療花の冷え　池田　博臣
子育てはあっと云う間よ桜咲く　岡田　淑子
千年待てず生き急ぐ春の雷　白木　暢子
北の春トドにもあらむ漁業権　高木　一惠
春ビールつまみ三点九〇〇円　吉野　精
初桜バッハの楽譜供へられ　股野　久子
鋼鉄の脚の楔よ花万朶　伊与田すみ

❑❑ 青葉研究句会報告 ❑❑

（於：千葉市民会館）

●第九十回（平成三十一年二月二十八日）

司会　小林　実

三月の海へ終りのなき電話　細根　栞
傾ぐ水仙Ωのかたちで猫潜む　たけなか華那
杉の花まだ昼食は食べてない　三須　民惠
子と渡る絵本の中の春の川　石井紀美子
老楽は陽炎の丈草の丈　長濵　聰子
春宵の奈落コンセントに電流　加藤　法子
きさらぎの病棟すみずみまで深夜　越野　雄治
雪解しずく存念いつか澱となり　池田　博臣
電線のシャープフラット燕来る　長井　寛
電柱を地下に埋めた街鳥雲に　細野　一敏
転倒傷二つ並べて春を待つ　棗　楕伊
蝦夷松の間合　文芸者雪に立つ　松﨑あきら
夕風の梅の匂ひや坂まなか　森井美惠子
電文の肘強ばりて六花　並木　邑人
日本に電信柱春夕焼　鈴木まんぼう
雨水とやピッポッパッ電子辞書　矢野　忠男
二月二十日の山吠えて海哭けり　徳吉洋二郎
鎌倉の旬の春風段葛　小林　実
どことなくたましひの揺れ半仙戯　山﨑　幸子

●第九十一回（平成三十一年三月二十七～二十八日）

草津一泊吟行会（ホテルおおるり泊）

西の河原公園にて

五年ぶりの一泊吟行会、参加者十名。各地からバスで草津に集合。日本一の露天風呂を楽しんだ後、五時間に及ぶ句会・袋回しは日付が変ったところでお開き。翌朝は雪の歓迎を受けました。

案内　矢野忠男、小林　実
司会（文・写真）徳吉洋二郎

アダムとイブ夙に湯冷めしておりぬ　徳吉洋二郎
半世紀ぶりの乙女や草津の湯　檜垣　梧樓
ジグザグに春折れまがる上州路　星野　一惠
三月に滲み込むバス等がいる　並木　邑人
陽は西へそろそろ斑雪動く　小林　実
斑雪六文銭の旗印　矢野　忠男
たんぽぽや工事真中の八ツ場ダム　池田　博臣
春風や断面厚きカツサンド　越野　雄治
バスと言ふ箱に詰りて春寒し　山﨑　幸子
啓蟄や挙って市井のツアー旅　細野　一敏

小出治重さんを偲んで

内田　庵茂

彼岸入りの翌日三月十九日に、小出治重さん（前顧問）が亡くなられた。その二日前に開催された総会・俳句大会に姿が見えないので心配していたが、かくも早く亡くなられるとは思いもよらなかった。享年八十九歳。昭和二十三年「初雁」（道部臥牛主宰）入会。昭和二十七年実兄小出秋光氏、長峰竹芳氏等と「好日」（阿部筲人主宰）の創刊に参加。昭和五十五年「源流」創刊、主宰に就任。実兄秋光氏とは性格、お人柄が大分違う感じで、実直で穏やかな感じの方であった。だが内には情熱を秘めておられ、世の風潮を憂え、悲憤慷慨する様な作品も見られる。

いんば農協俳壇、四街道市「市政だより」俳句欄の選者、四街道市社会教育委員、市の芸術文化団体連絡協議会会長等を歴任され、地域の教育文化向上に貢献された。また小中学生の俳句指導に熱心に取組まれ、「源流」に作品を掲載、講評しておられた。

句集は『花桔梗』『雲の芯』『紫光音』『半世紀』『天象』『土星』『無限界』。第六句集『土星』は第三回文學の森大賞優良賞を受賞。筆者は『無限界』を送って頂き、また当協会の俳句大会で治重さんから二回特選賞を頂いた。短冊は非常に達筆で、いずれも大切に保管している。

（合掌）

追悼　三苫　知夫さん

並木　邑人

四月九日、元会長　三苫知夫さんが逝去された。享年八十五歳。

昭和八年福岡県生。八幡製鐵所入社。三十年「自鳴鐘」に入会し、横山白虹に師事。職場の先輩益田清等とともに俳句に打ち込む。その後俳句を一時中断し、四十四年君津製鐵所へ転勤。益田清との交流が復活し、四十七年益田が創刊した「きみさらず」に参画し編集長。四十九年「自鳴鐘」復帰。以来白虹、房子、寺井谷子三代の指導を受ける。

平成四年益田が第三代会長に就任するとともに幹事となり、以降事務局長、副幹事長、幹事長、副会長と努め、十九年第六代会長に就任。

この間、平成五年第一句集『千五百』上梓。二十七年第二句集『獺の祭』を開板すると、千葉県俳句作家協会による第一回千葉県俳句大賞準賞を受賞。

日本を代表する企業の人事を担当したこともある三苫さんは、誠実・温厚な方との印象がある。平成二十九年に鋸南町でミニ吟行会を催した際、二十五年前の鋸山吟行のことなど、親しく話をさせていただいたことが思い出される。

三苫さんと言えば、高炉俳句の作家。

灯の高炉二基星合の空焦がす　知夫
高炉わが墓標のごとし夕枯野　知夫

（合掌）

❑❑ 柏研究句会報告 ❑❑

●二月は雪のため中止

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第八十一回（平成三十一年三月九日）

司会　髙橋　宗史

三月や黒い津波を思い出す　岡田　春人
春蘭の咲くふるさとや塩羊羹　下村　洋子
ＡＩと夢の境界春はあけぼの　佐藤　鈴子
故郷喪失蕗のとうに逢はざりき　髙橋　宗史
風人のかたちに揺れる柳の芽　長井　寛
独活匂う魂抜けてゆくように　椎名　鳳人
雛ふと夜更けに外出してゐるか　井上けい子
鳥雲に都会は人のスクランブル　小林　俊子
春雷や棒となりけり真夜の樹々　野口　京子

●第八十二回（平成三十一年四月十三日）

司会　椎名　鳳人

山焼きの天より下りる縄梯子　長井　寛
ごめんねの代りにふたつ蓬餅　川上　典子
平成を吾妹の如く惜しみけり　木之下みゆき
蓬餅皺うつくしく邂逅す　岡田　春人
初初しさ走るキャンパス花明り　小林　俊子
花の夜の記憶ガラスの厚さかな　伊藤　希眸
草笛は不戦の証し令和来る　椎名　鳳人
千鳥ヶ淵の斜面いっぱい花が散る　井上けい子
元号に些かの違和散るさくら　佐藤　鈴子
中くらいの粒酸っぱいのがいい苺　髙橋　宗史
春月や噂がひとり歩きする　小張　直子
万葉を賞で花を愛で令和なり　野口　京子
抱卵の春の重さに家出する　下村　洋子
鉄臭や井戸より水の春光る　栃木　きよ

図書紹介

■ 句集『水尾のかたち』　黒澤　雅代
平成三十一年三月二十日刊　本阿弥書店

如月の濁らぬものにオルゴール
安房上総麦が熟れるという日なり
オリオンの加わっている指定席

■ 句集『共　鳴　り』　小野　功
平成三十一年三月三十一日刊　現代俳句協会

懐の刃磨いて雲の峰
真昼から茶碗に潜む星月夜
大向日葵エッフェル塔にあこがれて

ひろば

■市原市春季俳句大会

四月二十日、五井会館に「香雨」同人太田寛郎氏を招聘して開催。兼題の部は県内外から五七〇句、当日の席題句会は五十六名の出席を以て実施した。（並木邑人記）

☆兼題の部／鞦韆・空・雑詠三句一組

市原市長賞
真砂女忌の空を映して忘れ潮　内田　聰子

市原市俳句協会賞
朝市や小さく坐して蜆売　稲澤　雷峯

市議会議長賞
春眠の耳より覚むる坊泊り　魚井満里子

教育長賞
草に寝て胸に雲雀の空のせる　池田　正子

☆席題の部／百千鳥・磯遊び

市原市長賞
廃校に残る校歌碑百千鳥　加藤　法子

市原市俳句協会賞
貴公子のやうな灯台磯遊び　松本　正子

市議会議長賞
百千鳥十七歳の墓標かな　伯ヶ部喜久男

教育長賞
百千鳥出払っている駐在所　重田　忠雄

掲示板

《会員・会友異動》

●逝去（会員）
染谷光葉、三苫知夫、小出治重、水野禮子

●入会（会員）大澤ひろみ、髙橋公子（復帰）

●退会（会員）浅野文子、日吉亜弥子、
阿部良治、浅野天一、大坂吉也、種村佑子
西村峰子、萩野明子、をがはまなぶ

●移転（会員）今田　述（多摩地区へ）
（会員）田中つとむ（地区内移転）
（会員）高遠朱音（埼玉県より）

●俳名変更　イザベル真央→伊与田すみ

《平成三十一年度臨時幹事会》

日　時　平成三十一年四月二日（火）
場　所　船橋市勤労市民センター
午後一時より　新旧役員事務引継
午後三時より　幹事会
一、協会の今後の活動について
①自己紹介
②運営体制について（引継結果報告）
二、平成三十一年度総会・俳句大会結果反省点その他
三、平成三十一年春の吟行会について
四、他地区総会報告
3／3神奈川　3／9都区　3／30多摩
五、現代俳句協会（本部）の動向について
3／23総会
六、第一三三号会報について
七、その他 ①会員・会友の入退会状況
②次回幹事会5／21午後五時より
③幹事会の開催時刻について
午後五時より　創立四十周年実行委員会
◎事業内容について
①記念大会　②合同句集　③基金募集
◎組織運営体制・スケジュール・予算編成など

❑❑ 事務局・編集部だより ❑❑

●今年度より木之下・石井・高野・深山・森須の新メンバーで編集に携わります。皆様のご意見、ご要望などお待ちしております。

現代俳句千葉　第一三三号
令和元年六月一日発行

発行人　千葉県現代俳句協会
会長　並木　邑人

現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田
六七七-一-A二一五
木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局
〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台
七-八-二八-八一〇
羽村美和子
TEL・FAX 〇四三-二五六-六五八四